

子どもが「問い」をもつことができる小学校社会科授業の開発  
—体験的活動の組み込みをととして—

専攻 教育実践高度化専攻  
コース 授業実践リーダーコース  
学籍番号 M07287J  
氏名 前川 高宏

## 1 問題の所在

近年、体験や経験が不足している児童が増えている。体験や経験が欠乏することは子どもが問いを持つことを困難にする。

体験や経験の不足は、学習課題を不成立にするだけではない。

子どもたちが「問い」をもつことができる授業にするためには、豊かな体験や経験が必要なのであるが、その体験や経験が不足していることが問題である。

体験を補う方法として、生活科や総合的な学習の時間での栽培体験活動や他の体験活動はもちろん重要であるが、社会科の授業として知識を獲得させるために直接働く体験的活動を組み込む必要があると考える。

## 2 研究目的

授業の導入部分で、資料の提示だけではなく、体験的活動を組み込むことにより、学習活動をスタートさせる際の最低限の知識をつけ、子どもたちが「問い」を成長させることができる。

そこで、体験的活動の組み込みを通して子どもが自ら「問い」をもつことができる小学校社会科授業の開発し、その有効性を確かめることを本研究の目的とする。

子どもが自ら「問い」を持つためには、体験と経験から身につけた知識と学校で習う科学的な知識とのギャップ認識が必要である。したがって、本研究では、体験的活動を子どもに与える授業の開発・実践を行うことによ

り、体験が不足している子どもたちにもそのギャップを生み出すことができ、子ども自らが「問い」をもつことができるのではないかと考えた。

## 3 研究の手順

子どもの学習問題発見や問いの成長過程に関する先行研究から、子どもが問いを持つために効果的な実践は何かを整理する。

導入部分に体験的活動を組み込むことで、子どもが問いを持つきっかけになる実践を分析する。そこから、指導案を改善し作成する。作成した指導案を実習校で実践し、子どもがどういった問いを持つことができたかを授業前・後のアンケート結果と、授業で記入した学習カードより必要な項目を選び分析する。その結果から、体験的活動を組み込むことで子どもがどのような質の問いをもつことができたかを調査する。

## 4 報告書の構成

### 第I章 問題の所在

### 第II章 先行研究の整理

#### 第1節 児童の問いの発生に関する研究

#### 第2節 体験的活動を取り入れた実践 西川満実践の分析

### 第III章 授業のデザイン

#### 第1節 疑似体験的活動を組み込んだ工業単元の開発

#### 第2節 情報単元「ニュース番組づくり体験的活動を組み込んだ情報について

の学習」

#### 第IV章 授業実践の内容

第1節 授業分析のために

第2節 「いろいろな食料生産」の実践分析

第3節 「わたしたちの生活と情報」の実践  
分析

#### 第V章 おわりに

第1節 結果の整理

第2節 今後の課題

### 5 実践の実際

実習校では、5年1組24名に社会科情報単元「ニュース番組づくり体験的活動を組み込んだ情報について」の学習第1次(6時間)を実践することができた。6時間の実践をとおして、分析で使用するワークシートやアンケートなどのデータを取ることができた。

### 6 結果と成果

児童自らが問いを持つためにはどのようにするとよいかを考えた。本研究では、先行研究を分析した。そこから、体験的活動を取り入れることにより児童の体験的知識と科学的知識とのギャップにより問いを持ちやすくなることがわかった。

これをもとに、実習で実践できる単元にどのような体験的活動を組み込むかを考えた。実践した単元では、ニュース番組づくり体験を取り入れた。そして、児童が制作したニュース番組と実際のニュース番組との比較をとおして、実際のニュース番組との違いにどの程度気づくのかを分析した。児童が持った問いをワークシートから抽出し、カテゴリーに別けるとニュース番組制作の工夫に対する問いが6(授業前)から16(授業後)へと増加した。

この結果より、体験的活動を組み込むことで児童がニュース番組について自らニュース番組制作に対する工夫を見つけようとする視点を持ったことがわかった。

### 7 指導案改善

分析を通して明確になった問題点を次の3点に整理する。

①ニュース番組では、「正確に速く伝えることも必要である」ことを児童がもっと考えられる展開にする。

②5W1Hを踏まえ、児童たちが制作したニュース番組で何がどのような順序で伝えられているか、特に何が情報として価値があるのかということを吟味させる時間を設定する必要がある。

③ニュース番組づくりで体験した役割を活かした内容の問いがより多くでてくるような指示を取り入れる。

これらの視点から第1次の指導案を改善した。

### 8 今後の課題

今後の課題は、改善した学習指導案を実践し、有効性を確認することである。体験的活動を組み込んだ授業をするにあたって、体験的活動と獲得させたい知識とをマッチさせることができる発問方法や指示の仕方など、児童が持つ問いを予測して授業を組み立て展開していかなければならない。さらにこれらの研究内容を活かし、さまざまな実践にあたり、より高度な問いを児童がもつことができる実践を考えていきたい。

主任指導教員 米田 豊

指導教員 吉水 裕也